

『長秋詠藻』評釈 (12)

檜垣孝 (大東文化大学文学部)

Notes on “Chōsyū Eiso” (12)

Takashi HIGAKI

【要旨】

藤原俊成の私家集『長秋詠藻』全歌の評釈。(その12、四三四番から四三八番。)

評釈

阿弥陀経

434 法の御名消えなん後の末までも弥陀のをしへぞ猶残るべき

【題意】『阿弥陀経』の趣意を詠んだ歌。

【歌意】 仏法の御名が消えてしまうであろう末法の世までも、阿弥陀仏の教えはなお残るに違いない。

【語釈】 ◇阿弥陀経 『無量寿経』『観無量寿経』とともに浄土三部経の一つに数えられる浄土教の根本経典。『無量寿経』を『大経』と呼ぶのに対して『小経』と略称する。阿弥陀仏の浄土である西方極楽世界の莊嚴な光景を描写し、この浄土に往生するために阿弥陀仏の名号を一心に念ずることを説き、六方世界の諸仏もこのことを称賛しているとして、浄土往生思想を簡潔平易に明らかにしているという。大正新脩大藏経には『仏説阿弥陀経』(大正藏、Vol.12、No.0366)の名で収められている。◇法の御名消えなん後の末までも 仏法の御名が消えてしまうであろう末法の

世までも。「法」は仏法。「御名」の「御」は尊敬の意を表す接頭語。「法の御名」は、歌題が「阿弥陀経」であるので阿弥陀仏を指しているとも思われるが、「阿弥陀仏という名」と訳しては下の句と矛盾を来しそうなので、ここでは、仏法そのものを漠然とさしていると考え「仏法の御名」と訳してみた。小学館『日本国語大辞典』(第二版)によれば、「法の名」は、仏門にはいった人や死者に授ける法名(ほうみょう)の意もあるが、「南無阿彌陀仏」という六字の名号をもさすという。「のりのみな」という句は俊成歌以外には検索できなかった。なお、和歌大系『長秋詠藻』(三類本)は、「法の道」となっているが、底本が同じ新編大観『長秋詠藻』は、「法のみな」である。「法の道」はよく用いられる句である。「消えなん後の末」は、「法の御名」が仏法そのものだと考えると、仏滅後に仏法が衰退していつてしまうという末法思想によって、(仏法が)消えてしまふであろう末法の世までもと訳せよう。末法思想とは、「釈迦の入滅後、仏教は正法・像法・末法の三時を經過して衰滅するという思想」で、正法とは、「教(釈迦の教説)・行(正しい教えの実践)・証(実践の結果得られるさとり)の三つが具わった時代」、像法とは、「教・行はあるが証を得る者はなくなる時代」、末法とは、「教だけしかない時代」をいうとされる。◇阿弥陀のをしへぞ猶残るべき 阿弥陀仏の教えはなお残るに違いない。「弥陀」は阿弥陀仏。その教えは、『阿弥陀経』に説かれている教え。末法の世になったとしても『阿弥陀経』の教えはなお残るに違いないと詠むことで、『阿弥陀経』の偉大さを讃嘆したもの。「をしへぞ」の「ぞ」は強意の係助詞、「残るべき」の「べき」は推量の助動詞「べし」の連体形。「ぞ」と呼応して、当然そうであるに違いないと強く確信する意を表明する係り結びとなっている。第四句中の「弥陀のをしへ」は、源俊賴の『散木奇歌集』第六悲歎部釈教に、

身のあやしさに思ひくづほれて念仏をだにせぬによそふ

身の程の憂きを思ふにまどはれて弥陀のをしへも頼まれぬかな(九八二)

という先例があること、和歌大系『長秋詠藻』に指摘がある。俊賴歌は「弥陀のをしへも頼まれぬ」と否定的であるのに対し、俊成歌は先述の通り肯定的で讃嘆の意を込めている点で対蹠的であるといえよう。

【評】 仏法が衰退してゆくこの末法の世にあつても、阿弥陀仏の教えはなお残るに違いないと詠んで、『阿弥陀経』の偉大さを讃嘆したもの。

石原清志氏は、俊成当該歌について、

次に『阿弥陀経』の歌をみると、その詠歌内容からみて、阿弥陀仏讃仰の総括的詠歎と考えられる。『阿弥陀経』は仏陀が舍利弗に、極楽の莊嚴を説き、功德の莊嚴を説き、阿弥陀仏の尊貴と、念仏による浄土往生と、釈尊と諸仏の証明をあげて信仰を勧めているのである。次に、^{③②}の歌は、

法の御名きえなん後のすゑまでも弥陀の教ぞ猶のこるべき

である。この^{③②}の歌は精確にいえば、『阿弥陀経』に該当すべき章は見当らない。しいていえば、次の章であろう。

舍利弗 於汝意云何 彼仏何故号阿弥陀 舍利弗 彼仏光明無量 照十方国 無所障礙 是故号阿弥陀 又舍利弗 彼仏壽命 及其人民 無量無辺阿僧祇劫 故名阿弥陀

これは仏陀が長老舍利弗に、阿弥陀仏は光明無量に十方の国々を照らして、障る所がなく、その寿命も無量無辺であることを言っている章であつて、②の歌の詠歌内容とは精確には一致しない。しかし、廣大無辺の仏徳を具足する阿弥陀仏を拡大して解釈すれば、一首の意は末法の末の世において仏法衰微の後においても、阿弥陀仏が衆生を救済し、極楽浄土へ引摺して下さるといふ大慈悲の教えは必ず残り、無明の闇に迷う現世の大衆を救護して下さるに違いない、という意味に受け取れよう。そう受け取れば、阿弥陀仏の廣大無辺な阿僧祇劫という時空を超越した生命の長さ、末法の世における欣求浄土の憧憬とを内に秘めた詠歌であり、『法華具経』歌の総括としてこの一首のもつ意義と価値が諒解せられるであろう。第五句の末尾の「べき」は単なる強調の連体止めではなく、必然的可能性を内包した作者俊成の感動的表白であろう。そこに、我々は暢達に歌い上げられた俊成の弥陀絶対の信仰をみる事ができるのである³⁾。

と詳述されている。但し、石原氏が解説されている、「末法の末の世において仏法衰微の後においても、阿弥陀仏が衆生を救済し、極楽浄土へ引摺して下さるといふ大慈悲の教えは必ず残り、無明の闇に迷う現世の大衆を救護して下さるに違いない」といふ俊成歌の意は、『阿弥陀経』中では、むしろ、

舍利弗、若有善男子善女人、聞説阿彌陀佛、執持名號、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不亂、其人臨命終時、阿彌陀佛、與諸聖衆、現在其前。是人終時、心不顛倒。即得往生阿彌陀佛極樂國土。

舍利弗よ、もし善男子・善女人ありて、阿弥陀仏（の名号）を説くことを聞き、（その）名号を執持（しゅうじ）するに、もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日（の間）、一心不乱ならば、その人命終る時に臨んで、阿弥陀仏は、もろもろの聖衆とともに、その前に現在したもう。この人（命）終る時、心、顛倒せず。（命終りて）すなわち阿弥陀仏の極楽國土に往生することをえん⁴⁾。

とある経文句などの方に、石原氏の指摘される「念仏による浄土往生」を勧める点では、よりよく該当するのではないかと考える。なお、この経文句中の「名号を執持する」とは阿弥陀仏という名号を念ずることであり、先述した末法思想の観点からいえば、「法の御名」を念ずるといふ「行」も廃れてしまふ末法の世に、なお念仏を勧めその功德によつて衆生を救うといふ『阿弥陀経』の「教」は残るに違いない、という一貫した歌意が見えてくるようである。

なお、西行詠「法華経二十八品歌」中の、「阿弥陀経」題の二首目に、

末法万年、余経悉滅、弥陀一教、利物偏増

無漏を出でし誓ひの船や留まりて法なき折の人を渡さん(「聞書集」、三五)

という歌があるが、この歌について、和歌文学大系21「山家集／聞書集／残集」(明治書院、西澤美仁・宇津木言行・久保田淳氏校注、平成一五・七)の補注に、俊成当該歌をあげ、「同じ偈を念頭に詠んだ歌か。」という指摘がなされている。この偈は「阿弥陀経」にはないが、同書の脚注に「原拠は西方要決。往生要集ほかに引用。」という。

以上で俊成の「法華経二十八品歌」一連三三首の評釈を終える。「法華経」二十八品に、開経『無量義経』、結経『観普賢経』を加え、さらに『般若心経』と『阿弥陀経』を添えたいわゆる法華具経を全て詠んでいることになる。この「法華経二十八品歌」は、待賢門院中納言君が待賢門院の落飾結縁のために人々に「法華経」歌を詠ませた折り、俊成にも詠えたものであり、俊成は、その要請に応じて経旨歌を詠み送り返すという結縁行為を十全に果たし得たといえよう。しかも、俊成の作は、歌題に応じた仏教教理を深く思案しながらも、それぞれに程度の差はあるものの美的な和歌世界を紡ぎ出したものとなっている。そこに、信仰一辺倒の人ではない歌人としての俊成の力量と意気込みを感じるのである。

故女院より、極楽の六時讀の絵にかゝれたるを、そのころどもの歌をかゝるべきに、歌なき所どもの猶おほかる詠み添へて奉れと仰せられしかば、詠みて奉りし所ぐの歌

六時讀

晨朝

朝ニ定ヨリ出程髯ニ天ノ楽ヲ聞

435 ほのかなる雲のあなたの笛の音も聞けば仏の御法なりけり

【題意】今は故人となった女院(美福門院得子)より、極楽の六時に勤行讚嘆する様子が絵に描かれていたが、その絵の内容にみあった歌も書かれるはずであるのに、該当する歌が無いものも猶多く残っているので、新しく歌を詠み添えて献上しなさいと仰せられたので、詠んで献上した(該当する歌が無かった)ところどころの歌。先ず、極楽の六時のうち晨朝時の讀。晨朝時には、後夜時の禪定から出る頃に、ほのかに天上より響いてくる楽を聞く、という趣意を詠んだ歌。

【歌意】天上の雲の向うから、ほのかに響いてくる笛の音も、よく聞いてみるとそれは御仏の説法そのものだったのだなあ。

【語釈】◇故女院 今は故人となった女院(美福門院得子)。美福門院得子(一一一七―一一六〇)は、中納言藤原長実の女、母は左大臣源俊房の

女。鳥羽院皇后で近衛天皇の母。近衛天皇が即位した日に皇后宮、久安五年(一一四九)八月、女院号を得て美福門院となる(『女院小伝』)。保元元年(一一五六)六月、鳥羽院が重病に陥った際に薙髮。鳥羽院崩御後はその菩提を願い仏事を勤めた後、永暦元年十一月二十三日崩御(四四歳)。遺命によって遺骨は高野山に葬られたという。俊成にとつては官位昇進の庇護者的存在となる女性で、『長秋詠藻』にも中巻二〇六番歌以下にしばしば登場する。◇極楽の六時讀の絵にかゝれたるを 極楽の六時に勤行讚嘆する様子が絵に描かれていたが、古典大系『長秋詠藻』の補注に、

「極楽」は阿弥陀仏の浄土で安養浄土、安楽国ともいう。西方、十万億の仏土を過ぎた彼方にある。阿弥陀仏はここで説法するという。「六時」は一昼夜を晨朝(へんちよう)、日中、日没(にちぼつ)、初夜、中夜、後夜(ごや)の六時に分つをいう。この六時に勤行をする習慣は印度以来行われた。恵心僧都に六時讀の作がある。六時讀を絵に書いたものがあつたが、その心を歌によむべきであるのにそれがなかつたのを俊成によませたのである。恵心の六時和讃は日本歌謡集成卷四所収。

と、簡潔に解説されている。俊成が依頼され新しく極楽の六時讀の絵に詠み添えた歌は、この四三五番歌から四五三番歌まで、合計一九首を数える。以下、これら一九首を「極楽六時讀歌」と総称して用いる。俊成の「極楽六時讀歌」については、既に多くの御論が出されているので、それら先学の御論に導かれながら評釈をしてゆきたい。

「極楽六時讀歌」一九首の歌題については、古典大系『長秋詠藻』の補注にいうとおり源信作とされる『浄業和讃』によつては、早く志田義秀氏にご指摘があり、以後、これを前提として研究が進められてきている。『浄業和讃』そのものは、

恵心の作とする六時讀即ち長秋詠藻に見る所の六時讀、は、その作者を確實にすることが出来ず、又善導の六時讀の翻譯でもないが、併し善導の六時讀製作の方法に倣つたものとは云へるのである。

と述べ、中国の善導の六時讀(大正蔵、Vol.47、No.1980『往生禮讃偈』)には習つたであろうとされている。江戸時代の『類題法文和歌集注解』の巻第十九に、「善導大師六時礼讃」の見出しで、俊成の「極楽六時讀歌」一九首が全て収められていて、その解説で、俊成歌の詞書には善導の六時讀に当てはまるものがなく、当麻曼荼羅の体に似ているものが多いといったことを指摘しているので、六時讀そのものは善導の六時讀であると考えていたことが分かる。なお、源信の『浄業和讃』については触れていないので、著者、畑中多忠は源信作の『浄業和讃』の存在には気付いていなかったものと思われる。

また、俊成の「極楽六時讀歌」の成立時期については、間中富士子氏は、

美福門院は永暦元年(一一〇〇)薨ぜられたから(中略)俊成四十七歳以前の作である。

と解説され、松野陽一氏は、

六時讀の絵に書く歌が求められたものでおなじくこの時期のものとも考えられるが、鳥羽・近衛両院の菩提を弔う意のこめられたものではないかと思われるので、これは次期のものと推測しておく¹¹⁾。

と解説されている。「この時期」とは、俊成の生涯の時期区分を「幼・少年期」「青年期」「壮年期・前期」「壮年期・後期」「老年期・前期」「老年期・中期」「老年期・後期」と区分けした¹²⁾、そのうちの「壮年期前期」をさし、「次期」とは、「壮年期後期」をさす。壮年期後期は、保元元年(一一五六)から仁安二年(一一六七)まで、俊成四三歳から五四歳までを指している。お二人の説を合わせると、俊成四三歳から四十七歳までのあいだの作ということになるうか。「絵にかゝれたるを」の「を」は、単純な接続詞。この絵の形態について川口久雄氏が、

美福門院が源信六時讀によって、絵師に描かせた六時讀絵というものはどういう形態のものであったか、浄土変相の図様などによって、部分的に六時讀にうたわれる各場面を描いたと思われるが、それは絵巻であったか、絵雙紙であったか、それとも障子絵・屏風絵のたぐいであつたか、あるいは持仏堂の扉絵・壁絵・柱絵・板絵のたぐいであつたか、それとも一枚一枚の紙絵であつたか、これも専門家の研究にまつほかない¹³⁾。

と詳しく考察されているが、具体的には未詳である。姫野希美氏は、川口氏の御論を引用しながら、

ここで想起すべきは、絵に配するという点で詠作条件が近似する屏風歌の伝統、特に玉上礪也氏が夙に指摘した「屏風絵中に書かれてある人物の心になつて作歌する」という主要な詠法の一つではなからうか¹⁴⁾。

と述べ、絵の形態そのものより絵を歌に詠むという点を問題にすることが大事で、いわゆる屏風歌の詠法に注目すべきであろうとされている。◇そのころどもの歌をかゝるべきに その絵の内容にみあつた歌も書かれるはずであるのに。「べきに」は推量の助動詞「べし」の連体形に接続詞「に」が付いたもの。「べき」は当然の意を表し、「に」は逆接の意を表す。◇歌なき所どもの猶おほかる詠み添へて奉れ 該当する歌が無いものも猶多く残っているので、新しく歌を詠み添えて献上しなさい。「奉れ」は、献上するという動詞の命令形。◇晨朝 極楽の六時のうち晨朝

時の讚。晨朝は、「辰の刻。現在の午前八時頃」(小学館『日本国語大辞典』(第二版))という。俊成の「極楽六時讚歌」の他の歌題は全て「日中時」「日没時」などと「何々時」とあるので、これも「晨朝時」とあるべきか。◇朝^ニ定^{ヨリ}出程^三天^ノ楽^ヲ聞 晨朝時になつて後夜時の禪定から出る頃には、ほのかに天上より響いてくる楽を聞く。晨朝時の極楽の様子を讃嘆したものである。「定」の語については、榎克朗氏が、

頭注に、「定―晨の行坐をさす。」とあるが、卑見によれば、後夜から晨朝に至るまで禪定に入っていたのである¹⁵⁾。

と説明されているとおり、「後夜時の禪定」であると考える。この一節は、前行の「晨朝」とともに、当該歌の狭義の歌題となっている。この歌題に対応する『浄業和讃』の該当箇所を、高野辰之氏編『日本歌謡集成』第四卷所収の『浄業和讃』本文を引用して示すと、「晨朝讚補接」の中に、

アシタニ定^{サヤ}ヨリ出ルホド

ホノカニ天ノ楽キケバ¹⁶

とあり、ほぼ同文である。当該歌の歌題での「聞」は「聞(きく)」という動詞の連体形「聞(きく)」で止められているが、『浄業和讃』では次節に続くため「キケバ」と確定条件を示した形となっている。「補接」とは、六時讀の中略部分、すなわち、「法要に用いられないため別置された中間部分のことである」という。また、極楽の様子を語る『阿弥陀経』に、

彼仏国土、常作天樂、黄金為地、昼夜六時、而雨曼陀羅華。其國衆生、常以清旦、各以衣祴、盛衆妙華、供養他方十萬億佛、即以食時、還到本國、飯食經行。

かの仏国土は、常に天樂をなし、黄金を地となす。昼夜六時に、曼陀羅華を雨ふらす。その国の衆生、常に清旦をもって、おのおの衣祴をもちて、衆の妙華を盛り、他方(世界)の十萬億の仏を供養し、すなわち食時をもつて、本國に還到して、飯食し、經行す。

とある、傍線部に対応する。「天樂」は、妙なるすぐれた音楽の意、「清旦」は、静かな朝の意、「衣祴」は、花を盛る器であるという(岩波文庫『阿弥陀経』、補注)。掲出した全体は、「其國衆生」つまり極楽の往生者が、「清旦」つまり晨朝時に勤行する様を述べたもので、以下、「極楽六時讀歌」の「晨朝讀」の歌題として四三八番歌までそれぞれに分割されている。◇ほのかなる ほのかに。形容動詞「ほのかなり」の連体形。この句は、第三句の「笛の音」にかかる。◇雲のあなた 天上の雲の向う。遙か遠くから聞こえてくるというイメージ。◇笛の音 笛の音。『浄業和讃』にいう「天ノ楽」を、より具体的なものにするために笛の音としたのである。◇聞けば仏の御法なりけり よく聞いてみるとそれは御仏の説法そのものだったのだなあ。「聞けば」を、動詞「聞く」の已然形「聞け」に接続助詞「ば」が付いて確定条件を示しているとして「聞いたので」と訳すのは理に勝ちすぎているであろう。「楽」をただ聞くのではなく、ほのかに聞こえる「楽」をよくよく注意して聞いてみるといったニュアンスで詠まれていると考えたい。「御法」の「御」は尊敬の意を込めた接頭語、「法」は教え。ここでは御仏の説法そのものと訳した。「なりけり」は、断定の助動詞「なり」の連用形に、過去の助動詞「けり」の終止形の付いたもので、気がついてみればそうだったのだという驚きと詠嘆を表明したものとなっている。

【評】 極楽の晨朝時の讚に和した歌。晨朝時の極楽では、天上からほのかに響いてくる笛の音も、よく聞いてみるとそれは御仏の説法そのものだったのだと詠んで、極楽の素晴らしさを讃嘆した和歌。

極楽は現実には阿弥陀信仰に厚い衆生が死後に往生する世界であるが、この「極楽六時讀歌」は、人間世界で六時の勤行を行うのと同じように、往生人が極楽で勤行讃嘆する様子をイメージして詠まれたものとなっている。作者自身が往生者となって今まさに極楽にいるかのように詠んでいるのである。そこに作者俊成の工夫がある。俊成歌が往生者の視点で詠まれていることを、多屋頼俊氏、榎克朗氏、久保田淳氏など先行の御論を取り上げながら、特に強く主張されているのが姫野希美氏の御論であろうと思われる。例えば、俊成の「極楽六時讀歌」全体について、姫野氏は、

と述べ、当該歌についても、
 本作品の基本的かつ決定的な特色は、十九首が一貫して往生者の視点から詠われたことだ。⁽¹⁸⁾

後夜から禪定にあつた人々が晨朝に定を出、仏を讃め称える天の楽を聞くと叙したもの。(中略) 当該歌はまず詞の面でも、結句「御法なりけり」の(発見の驚きを込めた) 詠嘆表現により極楽浄土にある臨場感を打ち出しているが、何より下句の法音は、禪定(妄想・雑念を去り心を一つの対象に集中して真理を探究すること)の境地にいた往生者なればこそ聞き得たものであり、一首の視点が往生者に置かれていることは明白である。⁽¹⁹⁾

と詳説されている。

なお、この歌には大岡信氏訳「長秋詠藻」に詳しい訳と評がある。最初に、

雲のかなたに笛の音が

ほのかにただよう

勤行に浄められて

わたしは聴く

あれは仏が御法を説く声

みことばのひとつひとつが天の笛

と訳し、

(中略)「笛の音」はすなわち「天ノ楽」だが、これは阿弥陀仏が説法することばのひとつひとつが、そのまま笛の音そのものとしてきこえるという至福境をいつている。⁽¹⁹⁾

と評されている。

『新統古今集』(巻第八釈教歌、八七七、詞書「美福門院に極楽六時讃の絵にかかるべき歌奉るべきよし侍りけるに、あしたに定より出づる程はのかに天の楽を聞く」)に入集。なお、私撰集の『夫木和歌抄』(巻第三十四雑部十六釈教、一六三七三)にも入集しているが、詞書が「極楽六時讃を」で、左注が「此歌は、震朝時、朝に定より出づる程、髡に天の楽を聞く」となっていて、歌題を二分した収載の仕方をとっている。

黄金瑠璃ノ庭ニ出テ人々共ニ花ヲ採ル

436 朝まだき露けき花を折るほどは玉しく庭に玉ぞ散りける

【題意】(同じく晨朝時の讃。)黄金や瑠璃で敷きつめられた庭に出て人々が共に花を採る、という趣意を詠んだ歌。この歌題も、前歌と同様『浄業和讃』の「晨朝讃補接」中の、前歌で引用した部分に続く、

黄金瑠璃ノニハニデテ

ヒトビト俱ニハナヲトル

とあるのによつて。川口久雄氏は、この前に「定ヨリイデテ見ヤレバノタカラノハチス空ニフル」を括弧付きで掲出し、

智光曼荼羅や清海曼荼羅の上部いちめん花花のさく楽園が描かれる。しかしここは浄土風景でなく人界の採花の場面であるから倭絵風に地上の風景を描いたのであろう。

と、その情景を説明されている。しかし、「黄金瑠璃ノニハ」は【語釈】の項で後述するとおり、『阿弥陀経』に説かれている極楽浄土の庭であらうから、倭絵風に描かれていたとしても極楽の風景が描かれていたのであろうと考えたい。

【歌意】朝も早い頃、露の多く置いた花を折る時には、黄金や瑠璃で敷きつめられた庭に、まるで宝の玉であるかのような露が散り落ちたことだ。

【語釈】◇黄金瑠璃ノ庭 黄金や瑠璃で敷きつめられた庭。「黄金」は、『阿弥陀経』に、

彼仏国土、常作天楽、黄金為地、昼夜六時、而雨曼陀羅華。

かの仏国土は、常に天楽をなし、黄金を地となす。昼夜六時に、曼陀羅華を雨ふらす。

とある。「瑠璃」も、同じく『阿弥陀経』に、

極楽国土、有七寶池。(中略)四邊階道。金銀琉璃玻璃合成。上有樓閣。亦以金銀琉璃玻璃硨磲赤珠碼碯、而嚴飾之。

極楽国土には、七宝の池あり。(中略)(池の)四辺の階道は、金・銀・瑠璃・玻璃より合成す。(階道の)上に樓閣あり。また、金・銀・瑠璃・玻璃・硨磲・赤珠・碼碯をもつて、これを嚴飾す。

とある。このように極楽国土が金・銀・瑠璃などで埋め尽くされていることについて、源俊賴は「観無量寿経文十六想観」と題する詠歌中の三首目に、

彼国の地は瑠璃や金を敷きて各光を放つといへる事をよめる

光さす瑠璃の苔路にいとどしく黄金の真砂を敷き重ぬらん(『散木奇歌集』第六悲歎部积教、九〇六)

と詠んで、極楽世界への想像をたくましくしている。早鳥鏡正氏は、

極楽浄土の自然は、何でも黄金や宝から成っているものとされている。恐らく、浄土經典のつくられたクシャナ王朝時代は、インド古代・中世史を通じて、金貨の流通が最も多かったし、また最も良質のものが通用していた時代であったので、このような希望的空想がかき立てられたのであろう。⁽²¹⁾

と述べ、金貨の流通が盛んであったというインド古代の貨幣経済の状況を根拠にした説明をされている。◇人々共^二花^ヲ採^ル 人々が共に花を採る。この句について、榎氏は、「晨朝讚」の「注解」において、

空から降って来た花を拾うとも、庭に咲いている花を手折るとも、両用に解せられるが、この段の終の方に「ワレラ天ノハナヲモテ、ホトケノ御ウヘニ供散セム」とあるから、前者の解が妥当であろう。(ただし長秋詠藻には、この詞書で「あさまだき露けき花を折るほどはたましく庭に玉ぞ散りける」と詠まれ、その次の歌も、「手折りつる花の露だにまだ干ぬに……」となっているから、俊成は後者の解を採ったようである。⁽²²⁾)

と解されている。俊成は、先に引用した俊頼歌を受容しながら、その発展形として往生者としての自分が他の往生者達と共に黄金や瑠璃で敷きつめられた極楽浄土の花を折っていると詠むことで、極楽に居る歓びを感得する歌として作り上げたのだといえよう。◇朝まだき 朝も早い頃。

「まだき」は、早朝の意で、形容詞「まだし」の連体形の名詞化したものかとされる(『角川古語大辞典』、「まだき」の項)。◇玉しく庭に玉ぞ散りける 黄金や瑠璃で敷きつめられた庭に、まるで宝の玉であるかのような露が散り落ちたことだ。早朝の花に置く露と、その露を玉と見立て、玉が散り落ちると表現したもの。

【評】 晨朝時の勤行として、仏に供養するために極楽浄土で花摘みをする様子を詠む。早朝の花を折る時には露が宝の玉となって散り落ちると詠んで、黄金や瑠璃で敷きつめられた極楽浄土の荘厳さをかみしめている歌。

姫野氏は、保安二年(1121)の「関白内大臣歌合」、「庭露」題二番右歌、藤原道経の、

朝まだき草葉の露の消えぬまは玉しく庭の心地こそすれ(三二)

を、早朝の花と露との伝統的な結びつきを具体的なイメージとして詠んでいる作の先蹤歌として指摘され、また、末の句「玉ぞ散りける」を取り上げ、

白露に風の吹敷く秋の野は貫きとめぬ玉ぞ散りける(『後撰集』卷第六秋中、三〇八、文室朝康)を想起させるとして、

この古歌が開拓した、零れる白露と水晶(或いは真珠)とのダブルイメージは、そのまま俊成歌にも投影される。つまり当該歌の下句には、黄金瑠璃(そのまばゆい色彩と質感)の庭、敷きつめたような白露、もしや水晶か——という具合に著しい視覚的イメージの重層を確認でき

るのである。⁽²³⁾

と述べ、俊成歌の持つイメージ豊かな世界について詳説されている。

『風雅集』(巻第十八釈教歌、二〇九二、詞書「極楽六時贊を歌に詠みけるに、晨朝を」)に入集。『夫木和歌抄』(巻第三十四雜部十六釈教、一六三七四)にも入集しているが、第三句が「折る程に」、第五句が「玉ぞ散りしく」となっていて小異がある。

次ニ加被ヲ蒙テ十方諸仏供養セム虚空界ヲ飛過テ歡喜国ヲ指テ行ム

437 手折りつる花の露だにまだ干ぬに雲の幾重を過ぎてきぬらん

【題意】(同じく晨朝時の讃。)次に仏の加護を蒙って十方諸仏を供養するために、虚空界を飛び過ぎて歡喜国を目指して行こう、という趣意を詠んだ歌。この歌題に見合う、「浄業和讃」の該当箇所は、同じく「晨朝讚補接」の中の、

ツギニ加被ヲカウフリテ

十方諸仏供養セム

アルヒハ五六十二

乃至百千結縁者

虚空界ヲトビスギテ

歡喜国ヲサシテユカム

とある傍線部にあたる。

【歌意】先ほど手折って持っている花の露さえまだ乾かないのに、いったい幾重の雲を通り過ぎて歡喜国にやって来たのであろうか。

【語釈】◇次ニ加被ヲ蒙テ 次に仏の加護を蒙って。「加被」とは、仏・菩薩が慈悲の力を加えて衆生を助け守ることという(小学館「例文 仏教語大辞典」)。◇十方諸仏供養セム 十方諸仏を供養しよう。「十方諸仏」は、上下の方向に東西南北とそのそれぞれの中間の方向を加えた十方の方向にある他方世界の諸仏の意。「供養」は、ここでは仏に花を捧げること。送り仮名「セム」は、動作をする意の動詞「す」の未然形に推量の助動詞「む」の終止形の付いたもので、供養しようという意になるが、次句に続いてゆくのので、【題意】では「供養するために」と訳した。◇虚空界ヲ飛過テ 虚空界を飛び過ぎて。「虚空界」は、虚空のように、一切を包括する、色も形もない真如の世界をいい、また、天地の間に広がる虚空と

いう領域をもいう（小学館『例文 仏教語大辞典』）。以下に「飛過テ」と続くので、ここでは「天地の間に広がる虚空」と考えてよい。◇歡喜国ヲ指テ行ム 歡喜国を直指して行こう。「歡喜国」は、阿闍仏の浄土で、東方にあるとされ、『法華経』『化城喻品』には「歡喜国」、『大宝積経』『不動如来会』および『維摩経』『阿闍仏品』には「妙喜国」、『阿闍仏国経』には「阿比羅提世界」とあるという。⁽²⁾「阿闍仏」は、過去久遠の昔、大日如来の教化により、発願、修道して成仏し、東方善快浄土を建てた仏で、西方の阿彌陀仏に対比され、今なお説法している仏であるという（小学館『日本国語大辞典』（第二版））。川口氏は、

手に手に花をもった結縁者群が雲にのつて歡喜国を指して迅速に飛行してゆくところ、こういう情景は今のところ浄土曼陀羅には描かれていないようだ。⁽³⁾

と解説されている。四三五番歌で掲出した『阿彌陀経』の經文句のうち、

供養他方十萬億佛、即以食時、還到本國

他方（世界）の十萬億の仏を供養して、すなわち食時をもって、本國に還到して、

を考えると、『浄業和讃』は、極楽浄土に往生した「百千結縁者」が瞬時に他方世界へ往く様を「虚空界ヲトビスギテ」と表現し、その他方世界の一つとして歡喜国を表述したのだと推測できよう。◇手折りつる花の露だにまだ干ぬに 手折って持っている花の露さえまだ乾かないの。前歌で、露の多く置いた花を折った往生者が、まだ露が置いたままの花を持って歡喜国へ飛来する、その時間の短さを「まだ干ぬに」という句で表現したのである。◇雲の幾重を過ぎてきぬらん いったい幾重の雲を通り過ぎて歡喜国にやって来たのであろうか。この下二句も歡喜国へ飛来する、その時間の短さを強調したものとなっている。姫野氏は、『阿彌陀経』の經文句「即以食時」を取り上げ、

朝食の前或いは一食の間の僅かな時間を指し、往生者の飛行は非常な速度を印象づけられるが、俊成歌は、前歌のイメージを受け継いだ秀句的表現「花の露だにまだ干ぬに」でもってその速さを強調した。「露はやくひやすき物なるにそれさへまだ干ぬ」間に幾重もの雲を超えてきたというわけだ。⁽⁴⁾

と詳説されている。

【評】 極楽浄土から他方世界の一つ歡喜国の仏を供養するために花を持って飛来するの、その花の露さえ乾かないうちに遙かに幾重もの雲を飛び越えてやってきたのだと詠んで、極楽世界での不思議な力に感嘆している歌。

後述するとおりこの歌は『新勅撰集』（巻第十釈教歌、五九二）に入集している。『新勅撰集』の古注釈書の一つである作者未詳の別本『新勅撰抄』には、

題の讚文、諸仏供養の心なるへし。彼国の菩薩仏の神力をうけて、一食の頃に他方無量の仏國に至て諸仏を供養する体をいへり。哥の心は、

花を供せんと思へは、手折つる花の露のひぬまに、はやいく重の雲を分過て、心のまゝに花を手向るさまをよめり。²⁷⁾
とあり、また、弄花軒祖能の『新勅撰和歌集抄』には、

阿弥陀経曰、其国ノ衆ノ生常ニ以テ清且各以テ衣一被ヲ盛リ衆ノ妙一華ヲ供ニ養ス他方ノ十万信仏ヲ。即チ以テ食一時ヲ還ニ到シ本国ニ一飯一食
經行云々。無量寿経にも此趣あり。かの国の衆生は内証皆仏菩薩ゆへかゝる神通の有也。哥意は手折し花の露のひぬまに、遥けき雲井路を
いかて過來ぬると歎したる也。²⁸⁾

とある。極楽浄土に顕現する神通力に注目し、時の間に幾重もの雲を過ぎて他方世界へ飛来したことに感嘆した歌だと評しているといえよう。

『新勅撰集』(巻第十釈教歌、五九二、詞書「美福門院極楽六時讃を絵にかかせられ侍りて、かくべき歌つかうまつりけるに、虚空界を飛び過ぎ
て歡喜国をさして行かむ」)に入集。

438 彼^ニ至^リ了^テ了^テ宝地^ヲ歩^テ進行^ム先^ハ香像^ノ白^ク香像^ト此^レ等^ノ大士^ニ値^ヒ遇^ス
春のくる方をさしつるしるしにやこち吹く風に花の散るらん

【題意】(同じく晨朝時の讃。)歡喜国に至つては、宝地を歩いて行こう。先ずは、香象菩薩や白香象菩薩など、これらの菩薩達にお逢いする、と
いう趣意を詠んだ歌。この歌題に見合う、『浄業和讃』の該当箇所は、同じく「晨朝讃補接」の中の、

カシコニ到リヲハリテハ

宝地ヲアユミテススミユカム

ミチノアヒダノ左右ニハ

宝樹宝池宮殿寺

無数ノタカラヲ莊嚴シ

人天充^メミチ往來セム

マズハ香象^ノ白^ク香象

コレヲノ大士ニ値遇セム

とある傍線部にあたる。

【歌意】春のやってくる東の方角をさして歩いて行った証拠であろうか、東から吹いてくる風のために花が散っているようだ。

【語釈】◇彼^ニ至^リテハ、歡喜国に至っては。「彼」は、前歌の歌題によって歡喜国と考える。◇宝地^ヲ歩^テ進行^ム、宝地を歩んで行く。【宝地】

は、歡喜国の国土をさす。極楽国土が金・銀・瑠璃などで埋め尽くされている宝の地であることについては、四三六番歌の【語釈】「黄金瑠璃ノ庭」において既述したが、歡喜国も阿闍梨の浄土（妙喜国浄土、また、善快浄土とも）であるので、極楽国土と同様であると意識されていると考える。

【進行^ム】の「む」は、助動詞「む」の終止形で、ここでは意志を表している。◇香像白香象、香象菩薩や白香象菩薩の意か。古典大系『長秋詠藻』には、「恵心僧都の六時讚にも香像白香象とある。」と注する。ただし、高野辰之氏編『日本歌謡集成』第四卷所収の『浄業和讃』では掲出したとおり「香象白香象」となっている。經典では、「像」の字よりも「象」の字の方が用いられるようだ。和歌大系『長秋詠藻』は、「未詳」と注

する。次項の「大士」を菩薩の意に解し、香象菩薩と白香象菩薩であると考える。香象菩薩と白香象菩薩ならば、『維摩經』の「仏国品」第一に、三万二千の菩薩の中から五十二人の菩薩名が列挙される中に並んで出てくること⁽²⁰⁾で知られている。また、香象菩薩だけならば、東京大学の「S A

T大正新脩大藏經テキストデータベース」を検索してみると、大香象菩薩をも含むが九六件を数えることができる。「像」の字を用いる「香象菩薩」を検索してみると、「大香象菩薩」の形で一件しか該当しなかった。香象菩薩は、「青香象なり、身より香風を出し菩薩の身も亦此の如きなり」⁽²¹⁾、白香象菩薩は、「其香最も勝れり大士の身香も亦是の如きなり」と説明されている。◇此等^ノ大士^ニ値遇^ス、これらの菩薩達にお逢いする。「此等」は、この方たち。複数の人物をさし示す。訳では、「大士」を複数形で示せるよう「これらの菩薩達」と訳した。「大士」は、すぐれた人のこと⁽²²⁾で、高僧の尊称でもあるが、ここでは菩薩のこと（小学館『日本国語大辞典』〈第二版〉）。「値遇」は、仏縁あるものにあうことだという（同前）。なお、古典大系『長秋詠藻』は、「大士値遇^ス」となっていて、「ニ」の文字がない。単純な誤植か。◇春のくる方、春のやってくる東の方角。◇さしつる。「さし」は、歩んで行く意の動詞「さす」の連用形。小学館『日本国語大辞典』〈第二版〉の「さす」の項には、「目あてとしてその方へ向ける。目ざす。」意から転じたものかとして、歩いて行く意があるとし、『名語記』六の、「道ゆくをば、さすといへば、これをはきて、とをくあゆむ心なるべし」を、用例の一つにあげている。「つる」は、完了の助動詞「つ」の連体形で、次句の「しるし」にかかってゆく。

◇しるしにや、証拠であろうか。「しるし」は、ある事実を証明するもの、証拠になるものをさしている（小学館『日本国語大辞典』〈第二版〉）。「にや」は、格助詞「に」に、係助詞「や」の付いたもので、ここでは疑問の意を表わす。◇こち吹く風に、東から吹いてくる風のために。「こち」は、東風。「に」は格助詞で、ここでは原因、理由を表す。「こち」と「吹く風に」の「風」は重複しているが、「東から吹いてくる風」と重複を避ける訳をした。◇花の散るらん、花が散っているようだ。「らん」は推量の助動詞の終止形。この句について、姫野氏は、

吹き散らされる「花」とは、（前歌を受け）往生者の手にある花とも考えられるが、春の到来する歡喜国に咲く花をもイメージさせる。

・又風吹散華、遍満国土……。

【無量寿經】P161

・自然の徳風は……毎日晨朝には、妙華を吹き散らして、仏土に遍満し……。『阿弥陀経』P99
の如き記述が参考になる。春到る国は風に舞う花に満ち、往生者もまた花片を浴びていよう。

・山深み杉の群立ち見えぬまで尾上の風に花の散るらんに詞統きは一脈通じ、その絢爛たる映像を強めるか。⁽⁴¹⁾
(経信集42)

と詳説されている。

【評】 東方にある歡喜国を歩んで行くその証拠に、東から風が吹いてきて手に持っている花を散らすようだ、と詠んで阿闍仏浄土の温かい雰囲気を感じてみせた歌。

歌題後半の「香像白香像此等ノ大土ニ値遇ス」は詠まれていない。その点に言及して、姫野氏は、先の引用に続けて、

ともあれ当該歌は、歡喜国での菩薩達との邂逅には触れず、その宝地の様を「春」、「こち」、「花散る」という全く観念臭さのない滑らかな詞の繋がりで鮮やかに描きだしたものと⁽⁴²⁾言える。

と一首の美的世界について解説されている。

ここまでで、「晨朝讚」の絵に詠み添えた四首を終える。源信の「浄業和讚」の「晨朝讚補接」の文句がそれぞれの絵に書かれていたのであるが、美福門院の晨朝讚絵の数が四つであったかどうかは分からない。俊成歌は極楽国土の晨朝の様子から詠み起こし、極楽の花を摘み(阿弥陀に捧げ)、その花を東方歡喜国に持って行き供養をするという往生者の勤行を体現する形で詠み進めているのであるが、歌題を翻訳調に詠む感じのする歌から、浄土の自然に身を置くような詠み方をしている歌まで幅広く詠まれているといえる。姫野氏は、先の引用に続けて、さらに、

以上見てきた436～438番歌は晨朝の勤行を連続して扱っていたが、往生者の行為を解説するでもなく、ストーリーの展開を丁寧に詠み表すというわけでもない。個々の歌は実に主体的に美的な場面を切り取り、また三首の連なりにおいても「花」、「露」の語を要としてイメージの華麗な展開を試みたのである。⁽⁴³⁾

と「晨朝讚」詠四首のうち、第一首の四三五番歌を除いた三首の美的世界について総括されている。

注

(1) 『日本大百科全書』第一巻(小学館、一九八四・一一)、「阿弥陀経」の項(藤田宏達氏担当) 参照。

(2) 『国史大辞典』第十三卷(国史大辞典編集委員会編、吉川弘文館、平成四・四)、「末法思想」の項(大隅和雄氏担当) 参照。

- (3) 石原清志氏『釈教歌の研究―八代集を中心として―』(同朋舎出版、昭和五五・八)。「㊸の歌」は、当該俊成歌をさす。
- (4) 本文は、岩波文庫『浄土三部経』下(中村元氏他訳註、岩波書店、昭和三九・九)、所収『阿弥陀経(漢文)』により、本文(漢文)とその書き下し文を併記した。以下、『阿弥陀経』の引用は全てこれによる。また適宜、「岩波文庫『阿弥陀経』」の略称を用いる。なお、引用中の「執持名號」については、観想念仏とも称名念仏とも考えられているようであるが(同書、補注参照)、ここでは天台浄土教的な観想念仏として理解しておきたい。
- (5) 拙稿「長秋詠藻」評釈(6)〔大東文化大学紀要、第四七号、二二・三三〕の、四〇三番歌の【語釈】「法華経二十八品歌」に記述紹介した。
- (6) 『平安時代史事典』(古代学協会古代学研究所編、角川書店、平成六・四)、「藤原得子」の項(野口実氏担当)参照。なお、美福門院の遺骨が高野山に葬られるに際して、同行した出家後の藤原成通(法名栖蓮)と俊成は贈答歌を交わしており、『長秋詠藻』の三九一番歌と三九二番歌の評釈において既述した(拙稿「長秋詠藻」評釈(4)〔大東文化大学紀要(人文科学)、第四五号、平成一九・三三〕参照)。
- (7) 俊成の「極楽六時讃歌」に関係する論文で、みるべきものは以下の通り。志田義秀氏「六時讃と梁塵秘抄、長秋詠藻、徒然草」(心の花、二八巻七号、大正一三・七)。多屋頼俊氏「和讃史概説」(法蔵館、昭和八・五)所収「長秋詠草に引用せられた六時讃」(本文一七頁頭注では「長秋詠藻にひかれた六時讃」、他)。榎克朗氏「長秋詠藻」所収「極楽六時讃歌」小注」(『時衆研究』、第一号、昭和四〇・四)。同氏「極楽六時讃」ノート―その一(序文)―」(『時衆研究』、第一四号(昭和四〇・一〇))。同氏「極楽六時讃」ノート―その二(晨朝)―」(『時衆研究』、第一五号(昭和四〇・一二))。間中富士子氏「国文学に摂取された仏教」(文一出版、昭和四七・一二)所収「長秋詠藻の六時讃歌」、他)。大岡信氏訳「藤原俊成 長秋詠藻」(日本の古典Ⅱ「和泉式部・西行・定家」(河出書房新社、昭和四七・一〇)所収)。久保田淳氏「新古今歌人の研究」(東京大学出版会、昭和四八・三)所収「藤原俊成の研究」(笠間書院、昭和四八・三)所収「壮年期前期」。川口久雄氏「藤原俊成六時讃和歌と美福門院極楽六時讃絵―浄土変相画とその絵解き和歌―」(『国語国文学論集』、風間書房、昭和四九・三)。姫野希美氏「藤原俊成の極楽六時讃歌の詠法をめぐって」(早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊〈文学・芸術学〉、第19号、平成五・二)。
- (8) 注(7)の志田氏論文。
- (9) 塚田晃信氏編『類題法文和歌集注解』(三)(古典文庫・第479冊、昭和六一・九)参照。
- (10) 注(7)の間中氏論文。
- (11) 注(7)の松野氏「壮年期前期」による。
- (12) 注(7)の久保田氏論文に提唱され(時期区分に関する初出論文「藤原俊成の青年期の作品について(下)」(『国語と国文学』、昭四一・

二二、松野陽一氏もほぼ賛同されている。

- (13) 注(7)の川口氏論文。
- (14) 注(7)の姫野氏論文。
- (15) 注(7)の榎氏「長秋詠藻」所収「極楽六時讃歌」小注。文中の「頭注」は、古典大系「長秋詠藻」の当該歌頭注をさしている。
- (16) 高野辰之氏編『日本歌謡集成』第四卷(東京堂、昭和一七・六)所収の「浄業和讃」。以下、「浄業和讃」の引用は全てこれによる。
- (17) 注(7)の榎氏「楽六時讃」ノートその一(序分)―。
- (18) 注(7)の姫野氏論文。なお、多屋氏、久保田氏の御論も注7のもの。榎氏の御論は、注7の「長秋詠藻」所収「極楽六時讃歌」小注、「楽六時讃」ノートその二(晨朝)―など。
- (19) 注(7)の大岡氏論文。略称として、「大岡信氏訳『長秋詠藻』」を用いること、拙稿「長秋詠藻」評釈(8)」（大東文化大学紀要〈人文科学〉、第四九号、平成二三・三三）の「凡例」で述べたとおり。
- (20) 注(7)の川口氏論文。
- (21) 岩波文庫『浄土三部経・下』、所収「浄土三部経」の解説(担当、早島鏡正氏)。
- (22) 注(7)の榎氏「楽六時讃」ノートその二(晨朝)―。
- (23) 注(7)の姫野氏論文。
- (24) 注(7)の榎氏「楽六時讃」ノートその二(晨朝)―参照。
- (25) 注(7)の川口氏論文。
- (26) 注(7)の姫野氏論文。引用中の「露ははやくひやすき物なるにそれさへまだひぬ」には注があり、「新古今和歌集」増抄より引く。」とある。
- (27) 本文は、大取一馬氏「新勅撰和歌集古注釈とその研究」下(思文閣出版、昭和六一・三)による。
- (28) 注27に同じ。「清旦」は、「清旦」の誤植か。
- (29) 鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』(大正蔵、Vol.14、No.0475)、卷上「仏国品第一」参照。
- (30) 加藤咄堂氏『維摩経講話』(史籍出版、昭和五八・一二)
- (31) 注(7)の姫野氏論文。
- (32) 注(7)の姫野氏論文。